

香川県庁舎東館 耐震改修工事報告書



(「序」より)

香川県庁舎東館は、1958(昭和 33)年に県庁舎本館として完成しました。日本のモダニズム建築を象徴する建物であるとともに、設計者の丹下健三氏の初期代表作としても知られており、開放的なピロティ、ロビー、南庭など県民に開かれた空間は、戦後日本の民主主義を具現化したものとされています。

また、コンクリートによる日本の伝統的木造建築の表現、猪熊弦一郎氏による陶板壁画をはじめとした芸術家との協働、庵治石や後藤塗を使用した地域色豊かな空間構成など、文化的に価値の高い建物として広く知られており、1998(平成 10)年に国から公共建築百選として選ばれたほか、1999(平成 11)年には近代建築の記録と保存を目的とする国際学術組織の日本支部 DOCOMOMO JAPANから日本の近代建築 20 選に選ばれるなど、国内外から高く評価されてきました。

一方で、完成後、半世紀余りが経過し現行の耐震基準を満たさなくなっていたことから、県では、建築や文化財等の専門家のご助言もいただきながら、防災拠点施設としての耐震性能や庁舎としての執務機能の確保のほか、工事費や維持管理費を含めたライフサイクルコストの優位性、文化的価値への影響等あらゆる観点から総合的に検討した結果、免震レトロフィット工法による改修が最適であると判断して 2017(平成 29)年 8 月から工事に着手し、2019(令和元)年 12 月をもって完成することができました。

本報告書は、耐震改修工事に取り組んだ関係者の努力の成果と香川県庁舎東館の改修前後の姿を後世に伝えるために作成したものであり、香川県庁舎東館が、今後も防災拠点施設としての機能を果たすとともに、文化的に価値の高いものとして、末永く県民の皆様親しんでいただけるよう努めてまいります。

(令和 3 年 3 月、香川県)

(7101295470)